

はせずランプを始めた。ランプは私の最も好きな遊びなので私はまた引きとめられた。そしてやつと気がついて見ると、電車の軋りさへ今はもう聞こえなくなつて居た。私は到頭泊り込む。離れのやうになつて居る一間を、玄の友人が、玄と私のために借りてくれた。

翌朝、眼ざめたとき、眞つさきに頭に來たものはうちの事であつた。昨夜、うちを出るときに花枝さんの云つた言葉が、びんと頭に響いて來た。

たとひ自分で、つち上げた計畫ではないにしても、兎に角私は久能さんを訪ねはしなかつたのだ。そして事實玄に逢つて、歸る事もしなかつたのだ。大叔父の家のものが、どんなに私をさげすみ怒るであらう。それを思ふと私は、ぢつとしては居られないのを感じた。

私達はまた玄の友人の部屋に集つて居た。友人達はまた洋食をとり、それがすむと再び昨夜の遊びをつづけたが、私は食事を取る氣にもならなければ、遊び仲間に這入る事も出来なかつた。部屋の中庭に向つた窓際に座つて、獨り私はしよんぼりと考へ込む。」「ふみちやん、こつちへいらつしやいよ。どこか悪いのですか」と、時々彼等は憶ひ出したやう

に私に聲をかけたが、私が黙つてそれに應じないと、彼等はまた遊びに夢中になつた。

私はもう耐へきれなくなつた。私は玄に云つた。

「あのねえ松本さん、ちよつと座をはづしてくれない？ わたしうちに歸らうと思ふんだけど、些し話したいことがあるの」

玄はいやいやながら仲間をはづれて立ち上つて來た。私達はまた、昨夜泊つた別の部屋に行つた。

「ねえ玄さん」と、部屋の中に座ると私は云つた「斯うして私、しよつちゆう出歩いたり泊つたりして居るでせう。私も、うちには居辛くてしようがないの……でねえ、あの話……何うなるの、早くきめてくれないこと？」

二人が知り合つた抑から、玄は、靜かな郊外に家を借りて同棲しようと思つて居たのだ。けれど、その後の玄の様子では、一向そんな氣持ちがありさうに見えなかつた。私は、玄にほんたうの誠意がないのではないかと疑ひ出して居た。けれど、さう思へば思ふほど、私自身が彼に引きつけられて行くのを何う仕様もなかつた。さうして、つひ幾度か家をあげ、外泊して、何とはなしに家に歸るのさへ心苦しくなつて居るのだつた。



「あゝあの話ですか」と玄は直ぐに應へたけれど、その顔は明らかに當惑げに見えた。「あの話は……さう、今、家を探して居るんですが、そして家もあるにはあるんですが……上野に友だちの借りた家があるにはあるんですが、友だちが郷里に歸つて居て、ラチがあかんで……でも、近いうちには何とかきまります。きめませう」

やつぱりいつものやうに捉へどころのない言葉だった。體裁よく遁げを張つて居るのだと云ふことが、私にはよくわかつた。

「さう?……」と私はそこで考へ込むだ。

今、何と云つても仕様がな。やつぱりこの捉へどころのない言葉を信じて當てもなく待つよりほかに途はない。けれど、それならそれと、昨夜のことをでも花枝さんの前に繕はねばならぬ。私はそこで、玄に云つた

「ちや、それはそれとしてね、昨夜は久能さんとこへ行くつて出て来たんでせう。だからこのまま歸るのは何だか工合がわるいの。それで私、久能さんとこへ行つて来たると云ふ證據になるものを何か欲しいんだけど、考へて見ると、此の春、私の着物を久能さんが質に入れたのがあるが、久能さんのところへ行つて来たると云ふしるしに、それでも持つて歸り度いんだけど……」

斯う云ふことは玄にお金をせびる事である。それは互に愛し合つて居る者同士の間なら何も不思議はない。けれど、玄が若し私をおもちやにすることだけしか考へて居なかつたとすれば、私が斯うした願ひをするのをいゝ幸にして、私が肉を賣つた報償として要求したのだと云ふ口實を彼に與へることになる。私はそれがいやであつた。が、うちへの手前、この着物は絶対に必要であるやうな氣持がして、云つていゝのか悪いか判然わからないうちに、つひかう口ばしつてしまつたのだ。

「あゝ、さうですか、判りました、判りました。それがいゝでせう、さうしなさい」と玄は、晴やかにそして輕やかに私の申出でに應じた。そして、さう云ひながらポケットを探つて居たが、「ちよつと待つて下さい」と立つて出て行つた。

ちやうどその時、前の廊下を、帯をもつた二人の女中が、玄が締めきらずに残して行つた障子の隙間から私の方を覗き込むやうにして見ながら通りすぎた。

通りすぎながら囁くやうに話し合つた二人の女中の聲が私の耳に響いた。

「ねえ、すみちやん、あの女一體なんだらう?」

「大かた下宿屋廻りの淫賣なんだらう?」



とそこへ玄が戻つて来た。そして五圓紙幣を一枚私の手に握らせた。涙を呑むで私はそれを受

取つた。

騒ぎつゞけて居る人達を残して私はその下宿を出た。もう十時すぎだった。ひどくはないが雨が降つて居た。傘もなし下駄もなかつたが、質を受け出さねばならぬので買ふわけには行かず、びしょ濡れつゝ、低い下駄ではねをあげながら巢鴨の久能さんの家まで歩いて行つた。

「御免なさい」と私は、久能の家の玄關の中に飛び込む。

「はい」と答へて出たのはしかし久能ではなかつた。

「あの、久能さんは？」

「久能さん？ そんな人知りませんが……」

私は呆氣にとられてその家を出た。そして、何うしたのだらうと、近くの「労働社」へ行つて訊ねて見た。

労働社にも私の知つて居る者は一人も居なかつた。けれど久能さんの消息だけはわかつた。

「久能さんですか、あの人は三木本君と一緒に大阪の方へ行きましたよ」と、労働社同人の一人が教へた。

「さうですか、困つちやつたなあ」と私が云ふと、

「何か御用だったのですか、失禮ですがあなたは何方ですか」と相手は云つて、まあ遊んで行けとすゝめてくれたけれど、私は自分の名をも語らずにそこを出た。

久能の行きつけの質屋を私は知つて居た。私はその質屋を訪ねた。

「へえ、確にそれはお預りしました」番頭は私の名指した品物について語り出した。「だけど、お

氣の毒さまですが、先月で期限が過ぎましたものですからこちらで處分してしまひました。何しろ、何度かけ合つてもたゞの一度も利子さへ入れて下さらないものですから……」

最後に残されたたつた一つの救の綱がふつつりとされて、泣くに泣かれぬ絶望の淵に投げ込まれてしまつたのを私は感じた。

私は別にその着物が欲しかつたのではない。たゞ、今の場合、絶対にそれが必要だったのだ。

のみならず、久能のやり方は何と云ふ不誠實だらう。今まで「主義者」と云ふものを何か一種特別の、偉い人間のやうに思つて居た事の如何に馬鹿らしい空想であつたかと云ふことを、私は今はつきりと見せつけられたやうな氣がした。美はしい天上の夢から、汚ないどぶの中へ叩き落されたやうな幻滅である。



寺の叔父が病氣になつて三の輪の大叔父のところへ訪ねて来た。全く衰へ果てた哀れな姿で彼はあつた。あれほど羞かしめられた私ではあつたけれど、この有様を見てはそんな反感なんかは持ちつゞけられなかつた。私は叔父をつれて病院まはりをした。が、何處へ行つてももう叔父の恢復を保證してくれるところはなかつた。

叔父は空しく歸らなければならなかつた。私は彼を飯田町驛まで送つた。

「左様なら、お大切に」

「有りがたう、しつかり勉強おし」

叔父は自分の命旦夕に迫つて居るのを知らないのである。けれど私はこれを知つて居る。「これが最後のお訣れだ」かう思ふと、やつぱり何だか寂しいやうな氣がした。

汽車が出ると、私は踵をかへした。もうやがて六時すぎでもあつたらう。街にあかくくと電燈がついて居た。此の寂しさを私は何處かで發散させたかつた。そして、何故ともなく幾臺かの電車をやり通した。

ぼんやりと立つて街の灯を眺めて居ると、たまらなく男に會ひ度くなつた。もう戀人とは云

へぬ男に會ひ度くなつた。そこで私は、近くの自働電話へ駆け込むだ。方々、心あたりへ電話をかけてやつと私は玄の居るところをたしかめた。

「丁度いゝところでした。僕、話したいことがあるんで會ひ度かつたんです」と玄は、本郷の趙のところへ来てくれと云つた。

趙のところへ私が行つた。玄は二三分間に趙のところに着いて居た。

「話ッて何なの？」と私はきいた。

「話と云ふのはですね」と玄は例の通り廻りくどい表現でもつて、趙と二人で獨逸へ留學する事になつたから、おわかれをしなければならぬと云ふ事を話した。

私はもう諦めて居た。

「さうですか、それは結構です」

「おわかれに愉快に遊びませう」と趙は云つて、洋食だの酒だのを取つた。

私は別に悲しいとも、悔やしいとも思はなかつた。たゞ絶望的な氣分がぶつくと沸きたつて居るのを感じた。

無茶苦茶に私はウキスキイを呷つた。どの位飲むのか、兎に角、足腰のたゞぬまでも飲んで



何が私をからさせたか

三八四

だ。

かうして私は、大叔父の家にも居たゝまらなくなつた。失つた戀に傷いた胸を抱いて、大叔父の家を私は出た。

仕事へ！ 私自身の仕事へ！

大叔父の家を出た私は、日比谷に在つた或る小料理屋にころがり込む。

それは「社會主義おでん」の名で通つて居る店で、主人は社會主義の同情者でもあり、自分も一ぱし社會主義者顔をして居たので、かへつてそれが呼びものとなつて、新聞記者達の社會主義者達の會社員達の文士だのと云つた社會の一部のインテリ連を多く集めて居た。

私はここで、晝間客を接待し、夜は學校に通つた。店からは學校の月謝と電車賃とを出して貰ふ約束で……

今までは晝間の學校に通つたのであつたが、夜の學校に轉じてから、私は一人の女の友人を見出した。新山初代さんがそれであつた。

初代さんは恐らく私の一生を通じて私が見出し得たたゞ一人の女性であつたらう。私は初代さんによつて多くのものを教へられた。たゞ教へられたばかりではない。初代さんによつて私は眞の友情の濶みと力とを得た。今度、檢擧されてから、警視廳のお役人が初代さんに「女の友だ

仕事へ！ 私自身の仕事へ！

三八五



ちで誰が一番好きか」と訊かれたとき、初代さんは一も二もなく私を名指したさうであるが、私も亦、初代さんが一番好きだと云ひ度い。初代さんはしかし、もう此の世の人ではない。私は今こゝまで書いて来て、初代さんに私の手を差し伸べたい衝動に強く動かされる。けれど、今はもう私のゝべる手を受けてくれる手がない。

初代さんは私より二つばかり年上であつたが、その頃はやつと二十一になつたばかりだつた。非常に頭のいゝ人であつたが、同時にまた、よい意味に於ける男性的な性格の持主でもあつた。意志が鞏固で、周囲に支配されるやうなことがなく、何處までも自分を立て通すだけの力をもつて居た。

初代さんの家庭は裕福だとは行かなくても私のやうなルンペン的な家庭ではなかつた。と云つても、初代さんは決して恵まれた生活をその家庭から受けはしなかつた。お父さんは酒のみで子供の事などに構つてくれる人ではなかつた上に、初代さんが女學校の二年生のときに死んでしまつた。それから間もなく初代さんは肺を病むで、半年以上も郷里である新潟の田舎に歸つて静養しなければならなかつた。初代さんが生死の問題に悩むで佛敎を研究し始めたのはその頃であつたらしい。病氣はしかし大した事はなかつた。そこで再び東京に出て、何でも府立の第二か

三を、優等で卒業した。

初代さんの素質のよさを知つて居る人々は、初代さんにもつと上の學校へ進むやうにとすゝめた。初代さんはけれど、父に死なれ、小さい妹をかへて居る母の細腕にたよつて上の學校でもあるまいと、自分で自分を支へる生活を求めた。そして或るタイプライターの學校に通つてタイピストとなり、その頃、英人の經營して居た或る會社の事務員となつて居た傍、夜は正則に通つて英語を勉強して居るのであつた。

何うして初代さんと友達になつたのか、はつきりと私は覚えてゐない。たゞ、夜學校で私達女の生徒が――四五人はあつたらう――教室の前の方に一緒に座らせられた關係上、初めはたゞ、ものも云はずに會釋しあふだけであつたが、いつか死と云ふ問題について初代さんと男生との間で議論を闘はして居るのを傍で聞いて居た私が、つひ口を挿んだのが始めであつたやうに思ふ。それと云ふのも、私が、初代さんのする事なす事に何等かの魅力を感じて居て、何時か近づきになりたいと云ふ考へを、夜學で初代さんを見ると直ぐ抱き始めて居たからであつたのは云ふまでもない。

此の問題について初代さんが云ふのであつた。



「私は肺病です。だから死については、かなり深く考へたつもりです。で、私は思ふんです。人が死を怖れるのは死そのものを怖れるのではなく、死に移る瞬間の苦痛を怖れる、ではなからうかと。何故つて、人は睡眠を怖れないぢやありませんか。睡眠は意識を喪失する點に於て、これもやはり一時の死であると言つてもいいのに……」

それをきいて居ながら私は、曾て朝鮮で死を決したときの感じを今一度はつきりと認識した。私は私の體驗から、初代さんの此の議論が間違つて居ると思つて口を出した。

「私はさうは思ひませぬ。私は私の體驗からかう斷言する事が出来るんです。人が死を怖れるのは、自分が永遠に此の地上から去ると云ふ事が悲しいんです。言葉をかへて云へば、人は地上のあらゆる現象を平素はなんとも意識して居ないかも知れないが、實は自分そのもの、内容なので、その内容を失つてしまふことが悲しいんです。睡眠は決してその内容を失つては居ません。睡眠はたゞ忘れて居るだけのことです」

無論この議論は兩方とも決して正しいとは云へないだらう。が、兎に角これを機縁として私達は話し合ふやうになつた。

「あなたには死の體驗があるのですか」と、初代さんは訊いた。

「え、あります」と私は答へた。

さうして、そんな事から私達は、學校がひけて歸るときにもその話をつづけた。そして私達は直きに大の仲よしとなつた。

今から考へて見て、私は別に、直接には初代さんの思想を學むとは思はない。けれど、初代さんの持つて居る本を通して、私は多くのものを得た。長い間私は本を読みたかつたが本が買へなかつた。ところが斯うして初代さんの友だちとなつてからは、初代さんのもつて居る多くの本を借りて讀んだ。

「労働者セイリヨフ」を感激をもつて私に讀ませたのも初代さんであつた。「死の前夜」を貸してくれたのも初代さんであつた。ベルグソンだとかスペンサーだとかヘーゲルだとかの思想の一般を、もしくは少くともその名を、知らせてくれたのも初代さんであつた。中でも一番多く私の思想を導いたものは、初代さんの持つニヒリステイックな思想家の思想であつた。ステイルネル、アルツイバーセフ、ニイチエ、さうした人々を知つたのも此の時であつた。

どんよりと曇つた、今にも何か降り出しさうな空模様のした夕方だつた。私は四時に店を出た



が、学校の始業までにはまた二時間もあるので、学校の近くの女の友人の下宿を訪ねた。

「いらつしやい」と鄭は私を見るなり直ぐに「いゝもの上げようと思つて待つて居ましたよ」と机の抽斗から一通の手紙を出して私に渡した。

それは玄からの便りで、途中から私にあてたものだった。母危篤と云ふ電報で、取るものも取り敢へず出立した、そんなわけでおわかれもせずに来たが赦してくれと云ふ手紙であつた。が、それは全く虚構の事實で、歸省は夙うの昔からきまつて居たのだつた。

「ふん」と云つて私はその手紙をそこに投げ出したが、もう別に腹も立たなかつた。鄭もやはりそれについては何も云はなかつた。

寧ろ、私が手紙を読み終るのを待つて居たとでも云ふやうに、鄭は今度は、三四枚の印刷物を私に見せた。それは鄭が出さうとして居た菊倍八頁の月刊雑誌の校正刷で、かねてその計畫を私にも話してあるものだった。

「さう？ もう出来たの？」と私も鄭と共に喜びを顔ちつゝ、それを手にとつて見た。が、内容については私はもう知りぬいて居た。鄭が常に書きためて居たものを印刷にしただけのもので、私はそれを、原稿のうちに見て知つて居たのだ。

たゞ一つ私の眼にとまつたものは、終りの方の片隅に載せられて居る短かい詩であつた。

私はその詩を読んだ。何と力強い詩であらう。一くさり一くさりに、私の心は強く引きつけられた。そしてそれを読み終つたとき、私はまるで恍惚として居る程だった。私の胸の血は躍つて居る。或る力強い感動が私の全生命を高くあげて居た。

私はその作者の名前を見た。私の知らない人の名前であつた。朴烈と云ふのがそれであつた。誰かの變名か知らず私は思った。けれど直ちに私はそれを否定した。何故なら、此の詩に値ひする男を私はまだ鮮人の間に見出して居なかつたから。

「これ誰？ 朴烈てのは？」と私は鄭にきいた。

「その人ですか。その人は僕の友達ですがね、しかしまだあまり知られてない、プーアな男ですよ」と、鄭は軽くその作者を扱つた。

「さうですか？ しかし此の人には何とも云へぬ力強さがありますよ。私はこんな詩を見たことがない」と、私は寧ろ、此の作者を認めない鄭を蔑むやうな氣持ちで云つた。

鄭はそれを餘り喜ばない風だった。

「此の詩の何處がいゝですか」



「どこがつてこたあない。全體がいゝ。いゝと云ふんぢやない、たゞ力強いんです。私は今、長い間自分の探して居たものをこの詩の中に見出したやうな気がします」

「馬鹿に感心したんですね。一度會ひますかね」

「えゝ、會はして下さいな。是非」

何時の間に降り出したのか、外には粉雪がさら／＼と静かな音をたてゝ居た。下の廊下で時計が六時を打つた。同宿の學生が何か聲高に話しながら、前の階段を降りて行つた。

「おや、あなた學校は？」と鄭は私に注意した。

「學校？ 學校なんか何うだつていゝの」と私は、事もなげに答へた。

鄭は怪訝さうに私の顔を覗めた。

「何うしてゝす。あなたは苦學生ぢやないんですか」

「さう、もとは熱心な苦學生で、三度の食事を一度にしても學校は休まなかつたのですが、今はさうぢやありません」

「それは何うしてゝす」

「別に理由はありません。たゞ、今の社會で偉くならうとする事に興味を失つたのです」

「へえッ！ ぢやあなたは學校なんかやめて何うするつもりですか？」

「さうね、その事について今しきりと考へて居るのです。私は何かしたいんです。たゞ、それが何麼ことか自分にも解らないんです。が兎に角それは、苦學なんかする事ぢやないんです。

私には何かしなければならん事がある。せずには居られない事がある。そして私は今、それを探して居るんです……」

實際私は此頃、それを考へて居るのだつた。一切の望みに燃えた私は、苦學をして偉い人間になるのを唯一の目標として居た。が、私は今、はつきりとわかつた。今の世では、苦學なんかして偉い人間になれる筈はないと云ふことを。いや、そればかりではない。謂ふところの偉い人間なんてほどくだらないものはないと云ふ事を。人々から偉いと云はれる事に何の値打があらう。私は人のために生きて居るのではない。私は私自身の眞の満足と自由とを得なければならぬのではないか。私は私自身でなければならぬ。

私はあまりに多く他人の奴隷となりすぎて來た。餘りにも多く男のおもちやにされて來た。私は私自身を生きて居なかつた。

私は私自身の仕事をしなければならぬ。さうだ、私自身の仕事をだ。しかし、その私自身の仕



事とは何であるか。私はそれを知り度い。知つてそれを實行してみたい。

恐らくこれは、初代さんを知つてから、初代さんが私に讀ませてくれた本の感化に依るのかも知れない。また、初代さんそれ自身の性格や日常の生活に刺戟されて、そんな考へを起したのかも知れない。しかし、兎に角私は、近頃こんな事ばかり考へて居たのである。

「さうです、たしかに僕達の前には、僕達がほんたうに仕なきやならん事があります」と鄭も眞面目になつて私に賛成した。

私達はそこで、今までに嘗つてなかつた眞面目さで、いろく々な事を語り合つた。が、ふと私は思ひ出した。今夜、美土代町の青年會館に「社會思想講演會」の開かれる事を。

私は鄭に別れを告げた。そして學校に行つて、初代さんを誘つて講演會に出かけた。街路はもう雪で眞白かつた。

この頃から私には、社會と云ふものが次第にわかりかけて來た。今までは薄いヴェールに包まれて居た世の相がだんくはつきりと見えるやうになつた。私のやうな貧乏人が何うしても勉強も出來なければ偉くもなれない理由もわかつて來た。富めるものが益々富み、權力あるものが何

でも出來ると云ふ理由もわかつて來た。そしてそれ故にまた、社會主義の説くところにも正當な理由のあるのを知つた。

けれど、實のところ私は決して社會主義思想をそのまま受納れる事が出來なかつた。社會主義は虐げられたる民衆のために社會の變革を求めると云ふが、彼等のなすところは眞に民衆の福祉となり得るか何うかと云ふことが疑問である。

「民衆のために」と云つて社會主義は動亂を起すであらう。民衆は自分達のために起つてくれた人々と共に起つて生死を共にするだらう。そして社會に一つの變革が來つたとき、あゝその時民衆は果して何を爲るであらうか。

指導者は權力を握るであらう。その權力によつて新しい世界の秩序を建てるであらう。そして民衆は再びその權力の奴隸とならなければならないのだ。然らば、××とは何だ。それはたゞ一つの權力に代へるに他の權力をもつてする事にすぎないではないか。

初代さんは、さうした人達の運動を蔑むだ。少くとも冷かな眼でそれを眺めた。  
「私は人間の社會に對してこれと云つた理想を持つことが出來ない。だから、私としてはまづ、氣の合つた仲間ばかり集つて、氣の合つた生活をする、それが一ばん可能性のある、そして一ば



ん意義のある生き方だと思ふ」と、初代さんは云つた。

それを私達の仲間の一人は、逃避だと云つた。けれど、私はさうは考へなかつた。私も初代さんと同じやうに、既にかうなつた社會を、萬人の幸福となる社會に變革することは不可能だと考へた。私も同じやうに、別にこれと云ふ理想を持つことが出来なかつた。けれど私には一つ、初代さんと違つた考へがあつた。それは、たとひ私達が社會に理想を持ってないとしても、私達自身には私達自身の眞の仕事と云ふものがあり得ると考へたことだ。それが成就しようとしまいと私達の關したことはない。私達はたゞこれが眞の仕事だと思ふことをすればよい。それが、さう云ふ仕事をする事が、私達自身の眞の生活である。

私はそれを仕度い。それをする事によつて、私達の生活が今直ちに私達と一緒にある。遠い彼方に理想の目標をおくやうなものではない。

或る寒い／＼夜のことであつた。例の鍾り私はカンバセーションをエスケープして鄭の宿へ遊びに行つた。

いつもの通り私は、案内も乞はずに鄭の部屋の障子をあけて、「今晚は」と聲をかけた。鄭と

今一人の見知らぬ男が火鉢を圍むで何か小聲で話して居た。

見知らぬ男はあまり背の高くない、瘦せぎすな、眞つ黒な房々とした髪をバラリと肩邊までのばした二十三四の男であつた。青い小倉の職工服に茶色のオーヴァを羽織つて居たが、オーヴァのボタンは千切れかゝつて危ふく落ちさうにぶら／＼して居るし、袖口はボロ／＼に破れて居り肱のあたりがペラ／＼に摺りきれて穴があいて居た。

「いらつしやい」と鄭は私を迎へた。

見知らぬ男はちよつと私を見たり、口をつぐむで、火鉢の火に視線を向けた。

「随分寒いわねえ」と、私は、つか／＼と部屋に這入つて、火鉢の脇に座つた。

「二三日見えなかつたですねえ、何うしましたか」と鄭は訊いた。

「いゝえ別に」と私は答へたが、ふと私は此の身窄らしい服装の客を思ひ出して、客に言葉をか

けた。  
「あなたは先達で、中華青年會館に開かれたロシア飢饉救済音樂會のとき、たしかあのステージのわきに立つていらつしやいましたね、ねえ、さうでせう？」

「さうでしたか？」と客は答へた。



が、それつきり、居たとも居なかつたとも云はなかつた。そして靜かに立ち上つた。

「まあ好いぢやありませんか」と私は慌てゝ止めた。「お話しなさいな。私別に用がないんですから……」

しかし客はやはり何とも答へないで、どつしりと疊の上に立つたまゝ、濃い眉毛の下から黒いセルロイド椽の眼鏡越しに、冷やかに私を見下した。

何とはなしに私は、ある威壓を感じた。

と、暫くしてから「失禮します」とはつきりとした聲で云つて、部屋を出て行つた。

「あゝ君、今晚は何處に泊りますか、僕のところへ泊つて行つていゝですよ。」と鄭は思ひ出したやうに急いで立ち上つて、廊下に客を追ひながら叫むた。

「有りがたう、今晚は駒込の友人のところへ泊めてもらひます」と、落ちついた寂しい聲が答へた。

何となく私はすまないやうな氣がした。私の精神はひきしめられて居た。

「鄭さん、あの人、何て云ふの？」

「あゝ、あの人？ あれは何時かあなたが大變感心した詩の作者朴烈君ですよ」

「あらツ！ あの人が朴烈？」と私は思はず顔をあかめて叫むた。

「さうです、あの男です」と鄭は落着いた調子で答へた。

私はそれから、朴烈について色々のことを鄭に訊ねた。鄭の云ふところによると、彼は今まで人力車夫や立ちん坊や郵便配達や人夫などをして居たが、今は別にこれと云ふ職がなく、たゞ一晩々々と親しい友人の處を泊り歩いて過して居るらしかつた。

「それぢやあの人、まるで宿なし犬見たやうね、それで居て何うしてあんなにどつしりしてゐるのだらう？ まるで王者のやうな態度だわ」

「あゝして友人のところを廻つて食ひつなげる間はねえ」と鄭は多少輕蔑的に云つたが、私がそれに不服さうなのを見て「でも偉いですよ、あの男は。あの男ほど眞劍に考へ、眞劍に行動するものは我々の仲間でもさう澤山はありませんよ」と云つた。

——さうに違ひない、さうに違ひない。と私は心の中で叫むた。

何ものか私の心の中で跳いて居た。何ものか私の心の中に生れて居た。

彼のうちに働いて居るものは何であらう。あんなに彼を力強くするものは何であらう。私はそれを見出したかつた。それを我がものとしたかつた。



何が私をかうさせたか

私は鄭と別れた。別れて店に歸つた。  
途中私はまた思つた。

四〇〇

——さうだ、私の探して居るもの、私の仕度がつて居る仕事、それはたしかに彼の中に在る。彼こそ私の探して居るものだ。彼こそ私の仕事を持つて居る。

不思議な歡喜が私の胸の中に躍つた。昂奮して私は、その夜は眠れなかつた。

翌日、朝早く私は鄭を訪ねた。そして、朴と交際したいから會はしてくれと頼むた。

「だが、あの男は始終ふらくして居るから丁度いゝやうに打ツつかることは困難ですよ」と鄭は云つた。

「いゝんです。私の店に来てくれればいゝんです。あなたがさう傳へてくれさへすればそれでいいんです」と私は答へた。

鄭はそれを承諾した。

だが、朴は來なかつた。四五日経つて私はまた鄭を訪ねた。

「あなた話してくれましたか」

「えゝ、二三日前の會で會つて、話しておきました」

「その時、朴さんは何と云つて？」

「さうねえ、朴君はたゞ——さうですか、と云つたきり何も云ひませんでしたよ。あまり乘氣でもなかつたやうです」

私はやゝ失望した。私のやうなものは相手にせぬと云ふのであらうか、と不安な氣持ちになつた。だが、私はまた望を捨てなかつた。私はたゞ、朴を訪ねて來る日を待つた。

十日経つた。けれど朴は來なかつた。二十日経つた。朴はまだ訪ねて來なかつた。

——あゝ、到頭駄目か、と私は自分に云つた。

私は寂しかつた。自分に何等の價値のないことを朴に裏書きされた様な氣がして、一層寂しかつた。仕方がない、自分は自分で生きるために、初代さんのやうにタイピストにでもなつて、職業を持たう、とさへ、私は決心した。

と、鄭に傳言を頼むで一ヶ月位も経つたとき、多分それは三月の五日か六日であつた。朴がひよつぐり私の店を訪ねて來た。

朴の顔を見ると私の胸はドキ／＼と躍つた。

仕事へ！ 私自身の仕事へ！

四〇一



「おや、到頭来て下さったのね」と、二組ばかりの酒のみ客を相手にして居た私は、朴を部屋の隅つこの卓子に導きながら小聲で云つた。

「ちやうど好い。少しゆつくりして居て下さいな、私も出ますから」

かう云つて私は、御飯をよそつて、煮込み豆腐や大根を持つて行つて朴に食べさせた。

やがてもう、私の學校へ行く時間である。私は二階に上つて仕度をした。朴には少しさきに店を出てもらう事にして……

いつものやうに腕に鞆をぶらさげて私は店を出た。朴は路地に立つて私を待つて居た。それから私達は電車通りまで一緒に出た。

が、電車通りまで出ると、朴はふと立ち佇つて云つた。

「あなたは神田へ行くんですね。僕は京橋へ用事がありますから、これで失禮します」

そして彼はすたくくと歩き出した。

「あゝちよつと」と私は後から追ひ絶つて云つた「明日もまたいらつしやいな、おいしいものを用意しときますから」

「ありがたう、参ります」

脇目もふらず彼は去つた。何となく私はもの足りなかつた。

翌日はおひる頃に來た。

朴の卓子の脇に腰をかけて、ほかの人にはきこえぬやうに私は云つた。

「今晚學校の前に來て居て下さらない？ 些しお話ししたいことがあるの」

「學校つて何處ですか」

「神田の正則」

「えゝ、行きませう」と彼はきつぱりと答へた。

やつと私は安心した。そしてその夕方を待つた。

約束の通り朴は學校の前の裸の街路樹の下に立つて居た。

「ありがたう、大分待つて？」

「いゝや、ほんの今來たばかりです」

「さうですか、ありがたう、少し歩きませう」

人通りの少いところを選つて私達は歩いた。けれど私達はお互に何も話さなかつた。往來で話すやうな軽い單純なものを私は話さうとして居るのではない。もつと静かな落着いたところを私



は探して居たのだ。

神保町通りに出たとき、大きな支那料理屋を私は見つけた。

「こゝへ上りませう」と私は、つか／＼とその階段を上った。朴は黙つて私の後について来た。

三階の小さな部屋に私達は落着いた。

ボーイが、茶を運んで来た。何か見つくるつて二三品持つて来てくれと、私はボーイに云ひつけた。

ボーイが去ると、私は、お茶碗の蓋をとつて見ながら云つた。

「ねえ、此のお茶の呑み方、あなた知つて？」蓋をとつて呑めばお茶滓が口の中に這入つて来

さうだし、蓋をしたまゝ呑むのも變だし、何だか妙ね」

「何うするんですかね、僕はこんな立派なところへ這入つて来た事がないから知りませんが」と朴は云ひながら、やつぱり私と同じやうに蓋をとつてみたり、また、蓋を試してみたりして居たが「しかし、呑むものだから要するに呑めばいゝでせう。何か規則でもあると云ふのですか」と蓋を少し斜にしてその間から呑むた。

「なる程さうすればいゝですね、きつとそんな事でせう」と私も朴の眞似をしてのむた。

お茶の味はあまりいゝものではなかつた。

ボーイが料理を運んで来る間、私達はたゞ、雑談を交へながら食事をとつた。私はあまり進まなかつたが、朴はかなりお腹が空いて居るらしい食べぶりだつた。

私は私の用件を話し度かつたが、何うも固くなつて話し難かつた。でも私はやつとの事で、ごちなく口を切つた。

「ところで……私があなたに御交際を願つたわけは、多分鄭さんからおきゝ下さつたと思ひますか……」

「えゝ、ちよつときゝました」

朴は皿から眼を放して私の方を見た。私達の瞳はそこでかち合つた。私はどぎまぎした。が、斯うなつてはもう、私は私の心持ちを思ひきつて云はねばならぬ。

私はつゞけた。

「で、ですね、私は單刀直入に云ひますが、あなたはまだ配偶者がお有りですか、または、なくても誰か……さう、戀人とでも云つたやうなものがお有りでせうか……もしお有りでしたら、私はあなたに、たゞ同志として、ごも交際して頂きたいんですが……何うでせう」



何と云ふ下手な求婚であつたらう。何と云ふ滑稽な場面だつたらう。今から思ふと噴き出し度くもあるし、顔が赤らんでも来る。けれどその時の私は、極めて眞面目に、そして眞剣に云つたのだつた。

「僕は獨りものです」

「さうですか……では私、お伺ひしたい事があるんですが、お互に心の中をそつくりそのまゝ露骨に話せるやうにして下さいな」

「勿論です」

「そこで……私日本人です。しかし、朝鮮人に對して別に偏見なんかもつて居ないつもりですがそれでもあなたは私に反感をおもちでせうか」

朝鮮人が日本人に對して持つ感情を、私は大抵知りつくして居るやうに思つたから、何よりもさきに私はこれをきく必要があつた。私はその朝鮮人の感情を恐れたのだ。しかし朴は答へた。

「いや、僕が反感をもつて居るのは日本の権力階級です、一般民衆でありません。殊にあなたのやうに何等偏見をもたない人に對しては寧ろ親しみをさへ感じます」

「さうですか、有りがたう」と私はやゝ樂な氣持ちになつて微笑した「だが、もう一つ伺ひたい

ですが、あなたは民族運動者でせうか……私は實は、朝鮮に永らく居たことがあるので、民族運動をやつて居る人々の氣持ちは何うやら解るやうな氣もしますが、何と云つても私は朝鮮人でありませんから、朝鮮人のやうに日本に壓迫された事がないので、さうした人たちと一緒に朝鮮の獨立運動をする氣にもなれないんです。ですから、あなたが若し、獨立運動者でしたら、殘念ですが、私はあなたと一緒に居る事が出来ません」

「朝鮮の民族運動者には同情すべき點があります。で、僕もかつては民族運動に加はらうとした事があります。けれど、今はさうではありません」

「では、あなたは民族運動に全然反對なさるんですか」

「いゝえ決して、しかし僕には僕の思想があります。仕事があります、僕は民族運動の戦線に立つ事は出来ません」

凡ての障礙が取り除かれた。私はほつとした。けれど、まだほんたうの事を云ひ出す程には機運が向いてないのを感じずには居られなかつた。私達はそれからまた、いろいろの雑談をした。すればする程、彼のうちにある或る大きな力が感じられた。

次第に深く引きつけられて行く自分を私は感じた。



「私はあなたのうちに私の求めて居るものを見出して居るんです。あなたと一緒に仕事が出来たらと思ひます」

私は遂に最後にかう云つた。すると彼は、

「僕はつまらんものです。僕はたゞ、死にきれずに生きて居るやうなものです」と、冷やかに答へた。

八時近くでもあつたらう。「また會ひませう」と私はボーイに會計を頼むた。三圓幾らであつた。

「僕が出ませう、今日は僕お金を持つて居ます」と、朴はオーヴァの外ポケットから、裸のバツトを三四本と一緒に、もみくちゃになつた紙幣を二三枚と銅貨や銀貨を七八箇掴み出してテールの上に置いた。

「いゝえ、私が拂ひます」と私は遮つた。「私の方がお金持ちのやうです」そして二人は連れ立つてそこを出た。

私達はそれから度々會つた。私達はもう、ぎごちない心で話し合ふ必要はなかつた。私達は互に心と心とで結ばつて居るやうな安らかさを感じて居た。そして到頭、私達の最後の諒解が成立した。

三崎町の小さな洋食屋の二階で、私達は話しをきめた。それは夜の七時頃であつた。私は、學校に行くには遅し、家に歸るには早かつた。そこで二人はまた、ぶら／＼と暗いお濠端に沿うて日比谷の方へ歩いた。

夜はまだ冷たかつた。二人は握り合つた手を朴のオーヴァのポケットの中に突き込んだまゝ、何處と云ふあてもなく、足の向くまゝに歩いた。

公園には人影がなかつた。乾干びた電車の音だけが夜の静寂を破つて居た。空には星、地にはアーク燈、そののみが靜に輝いて居た。

朴は常になく陽氣に語つた。

朴の語るところによると、彼は慶尚北道の田舎に生れた。家柄は常民で、代々百姓をして生計を立てゝ居た。けれど祖先にはかなり學問もあり、社會的地位もあるものもあつたやうである。父は朴の四つのおとき死んだが、母は非常に慈悲深い女で、小さかつた時分、朴は母の足と自分の足とを縛りつけてからでなければ眠れない程、母を慕つて居た。七つの時から村の寺小屋に通ひ



九つの時から村に建てられた普通學校に通つたが、頭は素敵によかつた。で、朴は學問をしたいと思います。と思つたが、丁度その頃から家運が傾いたので、兄は朴を百姓にさせようとした。そして事實朴も百姓をした。が、學問をしたいと云ふ朴の望みは遂に抑へきれなかつた。で、十五の時彼はひそかに大邱にとび出し、高等普通學校の試験をうけたが、試験は見事パスしたので、兄も見かねて苦しい中から彼に學資を送つた。その頃から朴は早稻田の講義録をとり、日本の文學者の書いたものなどを讀んだ。そして彼の思想はだん／＼と左傾した。

獨立運動に参加しようとしたのは其頃であつた。けれど彼は直ちにその運動の虚構を知つた。支配者が變つたところで、民衆には何のかゝはりもないと、彼は思つた。そして十七の春東京へ來た。

東京へ來てからの彼の生活は苦闘の歴史そのものだつた。彼はだん／＼と自己に沈潜して行つた。彼はもう、口さきや筆のさきでの運動なんかに興味を失つた。彼は彼自身の道を行かうとした。

もつともこれは、この時凡て彼が語つたのではない。彼は餘り自己を語らない男である。彼の語つたのは断片的なことばかりだつた。その断片的な事を、私が後から人に聞いたところによつ

てつゞり上げただけの事である。

私達は事實、過去を語るよりは將來を語つた。二人で拓り開いて行くべき道を、淡い希望をもつて語り合つた。

「ふみ子さん、僕は本當に眞剣に運動するために木賃宿に這入りたいと思ふんですが、あなたは「何です」と、朴は不意にかう云ひ出した。

「木賃宿ですか、いゝですわね」と私は答へた。

「しかし汚ないですよ、南京蟲が居ますよ、あなた、辛抱が出来ますか」

「出來ますとも、そんな事辛抱出來ない位なら、何もしない方がいゝでせう」

「さうです、たしかにさうです……」

かう云つて朴はしばし口を緘むだ。が、しばらくしてまた彼は云つた。

「ねえ、ふみ子さん。ブルジョア連は結婚をすると新婚旅行と云ふのをやるさうですね。で、僕等も一つ、同棲記念に祕密出版でもしようぢやありませんか」

「面白いですね、やりませう」と私は少しはしやぎ氣分で賛成した「何をやりませうか。私、グロのパン略を持つて居るが、あれを二人で譯しませうか」



朴はしかし、反對した。

「あれはもう譯が出て居ますよ。それに、人のものなんか出したくないですね、それよりも貧弱でも二人で書いた方がいゝですねえ」

私達はさうした計畫に熱中して居た。気がついて見ると、いつの間にか私達は公園を出て街の往來に出て居た。そして時もうかなり進んで居るやうであつた。

「何時でせう、九時には私歸らなきゃならんだけど……」  
残り惜しい気持ちで私が云つた。

「さあ、ぢや、こゝで待つて、下さい。僕ちよつと見て來ますから」

斯う云つて朴は、電車交叉點前の交番まで時計を覗きに行つた。——と云ふのは、私達は二人とも時計と云ふものを持つたことがないから……

朴はやがて戻つて來た。

「九時に十七分前です」

「さう？　ぢや歸らなきゃならぬわねえ」と私が云ふと、朴が云つた。

「もう三十分はいゝでせう。だつて、學校が九時に退けて電車が十分かゝると九時十分でせう。」

それなら、まだ二十五分や三十分はいゝですよ」

「何うもありがたう、あなたはいゝ事を教へてくれます」

そこで私達はまた手を繋ぎ合つて再びまた公園の中に行つた。そして木蔭のベンチに腰を掛けて、冷たく凍つた頬ツベたをくつゝけたまゝ、凝乎として居た。

が、愈ももう時がなくなつたので、名残り惜しげに立ち上つた。

公園の出口に近づいた時、私は訊ねた。

「で、今晚は何處へ歸るの？」

「さうですねえ」と朴はちよつと考へて居たが「麴町の友人のところへでも行つて見ませう」と寂しく答へた。

「さう！　だけど、さうして家がなくても寂しくありません？」

「寂しいです」朴は足下を躓めながら沈んだ聲で答へた「斯うして達者で居るときは何でもないですが、病氣なんかすると心細いですよ。ふだんは親切な人でもさうした時はいやがりますからね」

「さうね、人は冷たいですからねえ、それにあなたは少しきやいや過ぎるやうだけど、今までに



何が私をかうさせたか

ひどい病氣びやうきした事ことがありますか、東京とうきやうへ来てから……」

「あります。去年きよねんの春はるでした。僕はひどい流りゆう感かんにやられましたか誰たれも看かん病びやうしてくれるものがないので、三日かばかり吞のます食くはずに本所ほんじよの木賃宿きちんやどでうん／＼唸うなつて居ゐました。その時ときこそ僕は此このまゝ死しんでしまふんぢやないかと思おもつて心細こころほそかつたですよ」

ある一つの感情かんじやうが胸むねにこみ上げて來きた。涙なみだぐもだ眼めをしばた／＼きながら、私わたしは朴ぼくの手てを袴ひしと握にぎりしめた。

「まあ、私わたしが知しつて居ゐたなら……」

暫しばらくしてから、朴ぼくはきつぱりとした調子てうしで

「では左様さやうなら、また逢あひませう」と、私わたしの手てを振ふり放はなして、神田かんだ方面ほうめん行ゆきの電車でんしゃに飛乗とびのつた。見送みおくりながら、私わたしは心こころの中なかで祈いのるやうに云いつて居ゐた。

「待つて下さい。もう少すこしです。私わたしが學がく校こうを出でたら私達わたしたちは直すぐに一緒いっしょになりませう。その時ときは、私わたしはいつもあなたについて居ゐます。決けつしてあなたを病氣びやうきなんかで苦くるしませはしません。死しぬるなら一緒いっしょに死しにませう。私達わたしたちは共に生いきて共に死しにませう」

### 手記の後に

私わたしの手記しゆきはこれで終おる。これから後のちの事ことは、朴ぼくと私わたしとの同棲生活どうせいせいきわつの記録きろくのほかは茲こゝに書かき記しす自由じゆうを持たない。しかし、これだけ書かけば私わたしの目的もくてきは足りる。

何が私わたしを斯かうさせたか。私自身わたししん何もこれについては語かたらないであらう。私わたしはたゞ、私わたしの半生はんせいの歴史れきしをこゝにひろげればよかつたのだ。心こころある讀者どくしゃは、この記録きろくによつて充分じゆうぶんこれを知しつてくれらるであらう。私わたしはそれを信しんじる。

間まもなく私わたしは、此この世よから私わたしの存在そんざいをかき消けされるであらう。しかし一切さいの現象げんさうは現象げんさうとして滅めつしても永遠えいゑんの實じつ在ざいの中うちに存そん續ぞくするものと私わたしは思おもつて居ゐる。

私わたしは今平靜いまへいせいな冷ひややかな心こころで此粗雜このそざつな記録きろくの筆ふでを擱おく。私わたしの愛あいする凡すべてのものゝ上うへに祝福しゆくふくあれ！



昭和六年七月五日印刷  
昭和六年七月十日發行



何が私をか  
かたせさるか

〔定價 金壹圓三十錢〕

著者 金子ふみ子

發行者 神田 豐穂  
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者 谷口熊之助  
東京市麴町區土手三番町二九

印刷所 春秋社印刷部  
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

發行所 春秋社

振替東京二四八六一  
電話日本橋  
六六六一  
九八七



春秋文庫

自然科學

- (1)永井 潜著……科學的生命觀★
- (11)石川千代松著……進化論★
- (18)ヘツケル著……宇宙の謎★★  
内山賢次譯
- (29)小酒井光次著……實驗遺傳學概説★
- (31)暉峻義等著……産兒調節論★
- (32)岡 邦雄著……自然科學史★
- (33)杉田直樹著……醫學と現代生活★★
- (42)石川光春著……植物と比較したる人間★
- (43)中澤毅一著……動物と比較したる人間(近刊)
- (46)富士川游著……科學と宗教★
- (49)三島康七著……生殖理論★
- (50)美濃部 熙著……動物の分類★★

—以下續々刊行—

哲 學

- (3)久保良英著……最近の心理學★★
- (6)阿部重孝著……教育學★
- (7)入澤宗壽著……教育史★
- (12)深作安文著……倫理學概説★
- (14)五來欣造著……政治哲學★
- (15)賀川豊彦著……宗教教育の本質★
- (22)ヂンデルバント著……十九世紀獨逸思想史★  
吹田順助譯
- (34)山邊習學著……佛教と日本文化★
- (39)川合貞一著……論理學★

—以下續々刊行—

★一ツが五十錢

# 悔懺の死

著 郎 次 大 田 古

復活！縮刷版！！

定價壹圓廿錢  
送料十二錢

「死の懺悔」に於てその血涙の文字を讀んだ人々の同情は、やがて感動の激發となり、讀者の聲となつて現はれたが、中にはかの、青山の大墓地の中から、あんなにもハンブルな、さゝやかな、古田君の墓標を探しあて、悔しみをもつてその墓標を倒してゆくやうな人々も現はれると云つたやうな事になつた。で、それを見た古田君のお父さんは、死んでからまでも我が兒を迫害させたくないと云ふ慈愛の心と共に、斯くまでも人々の同情や敬慕の的となることは刑に死んだ我が兒の受くべき當然な報酬でないかと云ふ謙讓な心から、固はく我が兒を永久に安らかに眠らせたい、そのために此の本ももうこれ以上世間に流布したくない、と云つた氣になれたのである。

まことにこれもまたゆかしさの極みである。そこで我々は、父君の此の意志を踐踏してまでも此の書を世に贈ることが出来なかつた。だが、それにしてもなほ、此の書の重版を要望せらるゝ世間の熱情に對して我々は如何に酬ゆべきであらうか。最近讀賣新聞紙上で發表された良書の推薦に於ても、如何にこの書が純粹なる感動のもとに推薦されたかと云ふことがわかるではないか。私はこれを——この書の永遠の埋没を、衷心遺憾に思つた。そこで久方振りに古田君のお父さんを訪ねて、斯かる書こそ永久に流布さるべきものであることを醇々と説いたのであるが、お父さんも遂に、それでは、と云ふことになつて、再びまた此の古田君の眞實なる心を世に贈ることが出来るやうになつたのである。何と云ふ喜びであらう。此の書が再び世に現はれんとき、それは更に多くの人々の間に讀まれ、更に深き感動を與へ得べきことを、私は希ひまた信ずるものである。

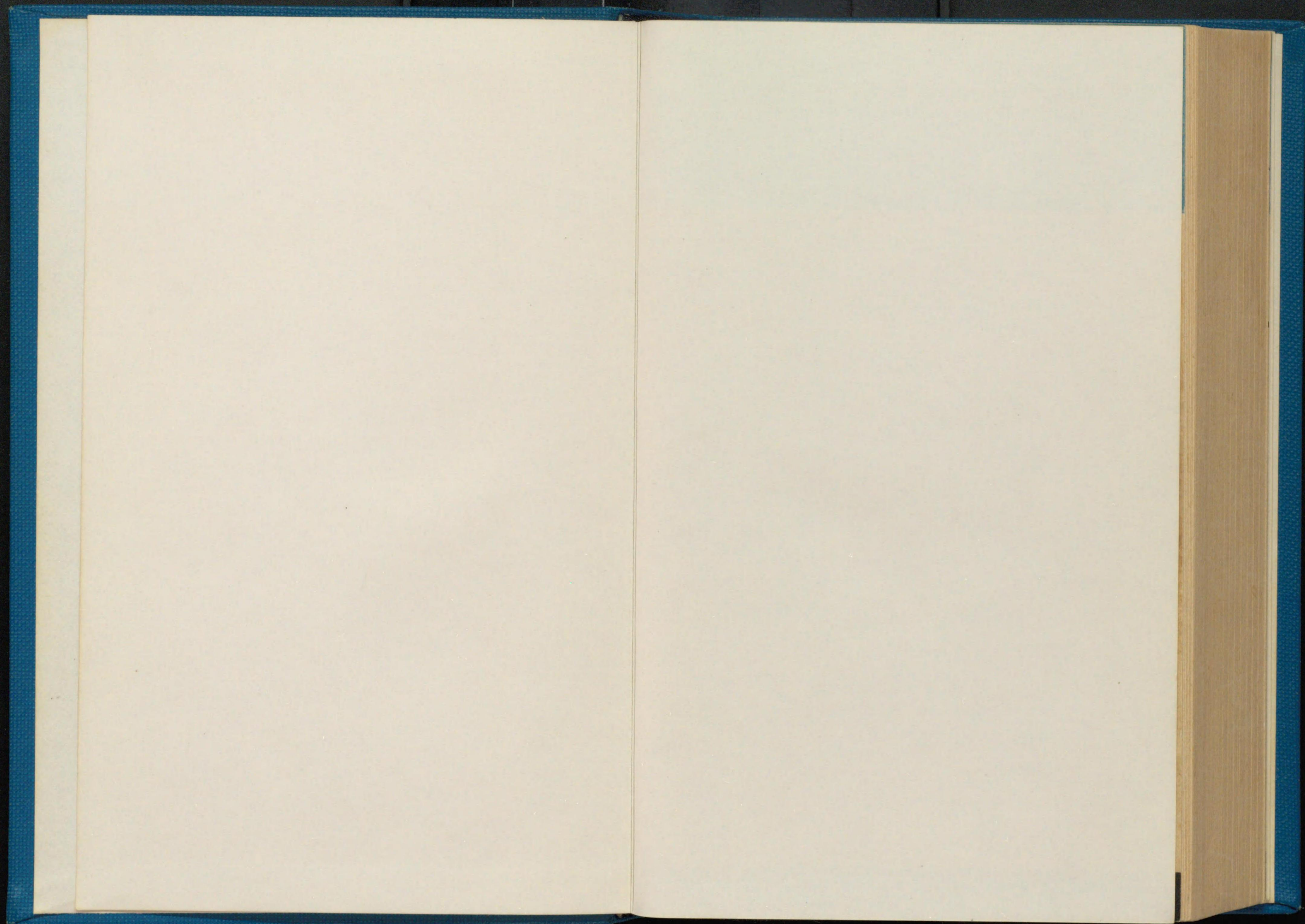
涙光る。死で詩を綴つた人は若かつた。その人の戀は清く優しく深く悲しかつた。その人は涙光る心の持主だつた。紙鶴と遊ぶ心のいぢらしさ冷たい牢獄の生活はどんなに親朋輩の住む温かい家庭を思はせたか。そのひとりの朝と夕。讀む人々の毗に涙光る。求むる道は遠く、法規は酷だつた。荆の道。眞にその人の生涯は淋しく峻しくやるせなくさへあつた。世に其人位己れを責めた若人があるだらうか。世に其人位愛へがある高きかざした人の憧れを高くかざした人があつたらうか。あの風貌を以て、あの心境を以て、あの心鏡を以て、あの涙光る。古田次郎君あゝ涙光る。

一六八四二 京東替振  
七六六一二 自話電  
七九六一二 至橋本日  
社 秋 春 橋 本 日 京 東  
五ノ二橋服吳

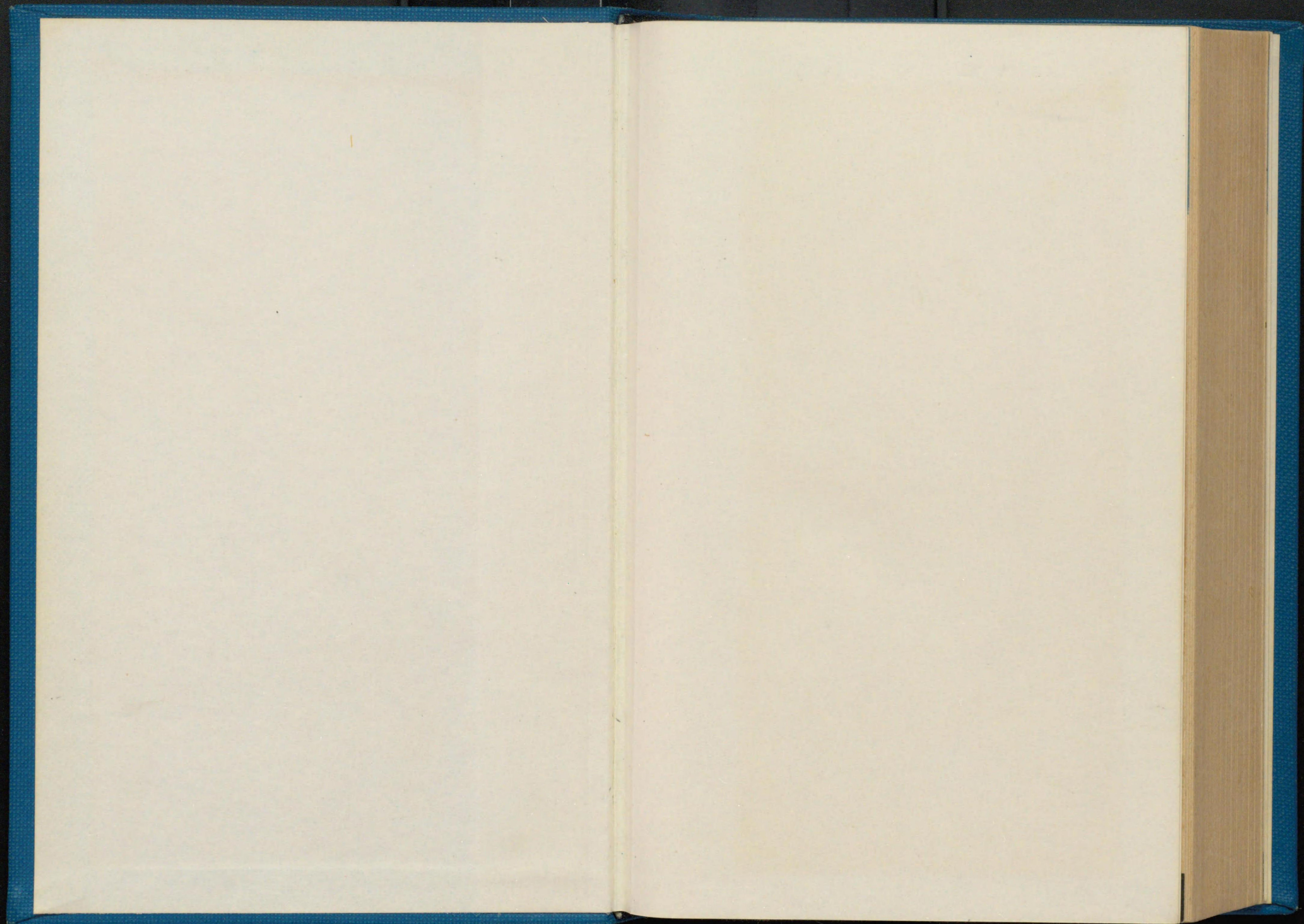


F 2K-28

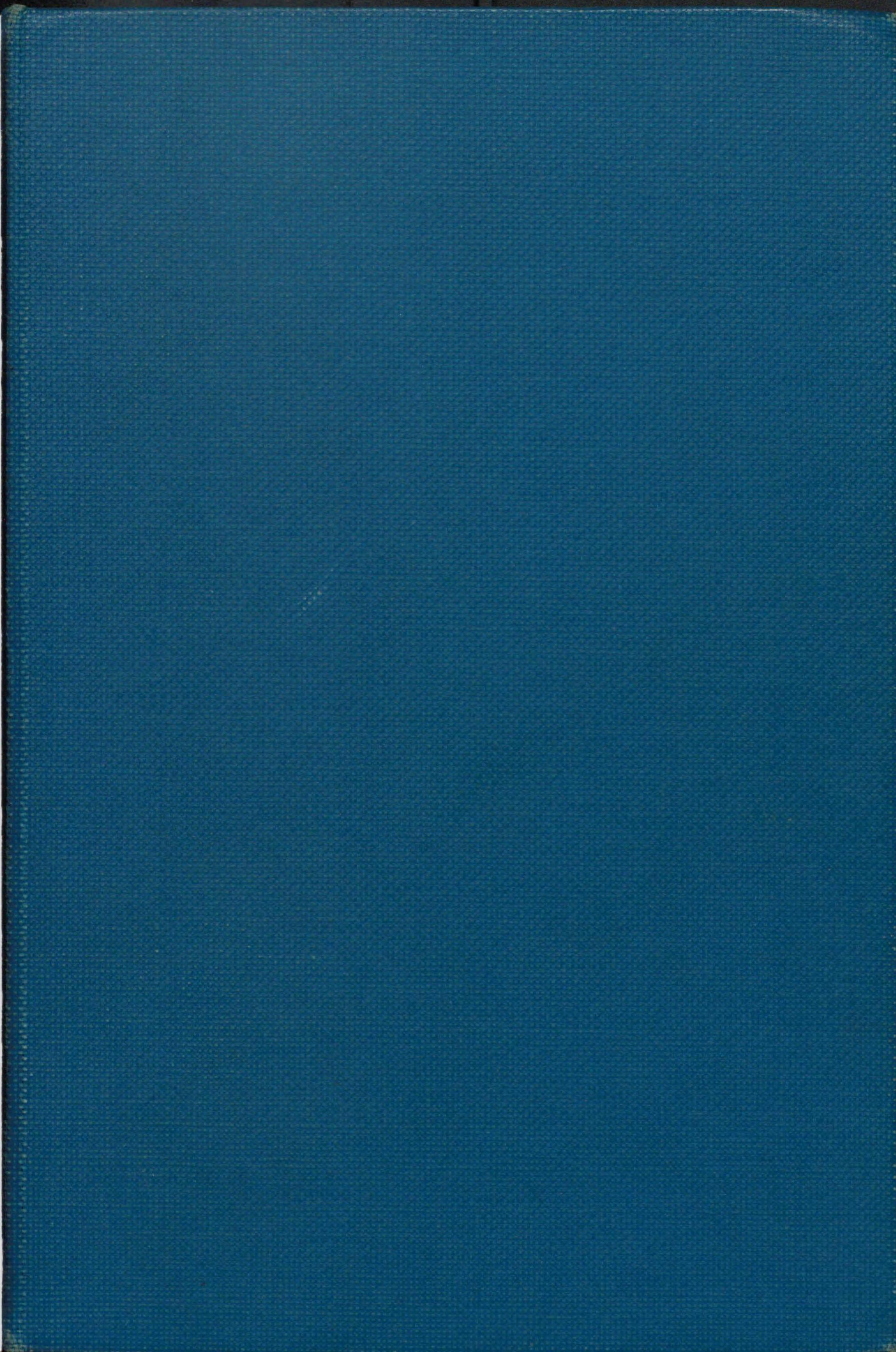












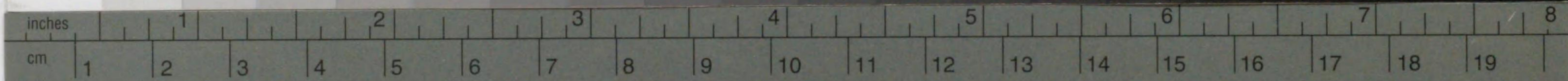


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

